偽聖女にされた令嬢はそれでも全てを救いたい

Niseseijo Ni Sareta Reijyo Ha
Soredemo Subete Wo Sukuitai

著 アルト
Alto

ill. 月戸
Tsukito

主な登場人物
メレア・レイカント
新たに指名された『聖女』。一見可憐だが……
メリッサ
弱き人々の為に尽力した修道女。ミレアとある接点を持つ。
レグス・ベルナンド
ベルナンド王国の王太子。婚約者のミレアを激しく憎む。
アイファ・テューバ
ミレアを慕う公爵令嬢。彼女の為にある行動を起こす。
リヨン・フィルド
剣の道を極めんとする、ミレアの兄。妹の良き理解者でもある。
レイン
ミレアに長年仕える使用人。無茶ばかりする主人を心配する。
ミレア・フィルド
『聖女』の前世を持つ侯爵令嬢。人助けに強い使命感を抱く。

1話

『美しい心の持ち主だけが、聖女になれるのです』

それはとあるシスターの言葉であった。

私の記憶の海に沈んでいた言葉の一つ。

『聖女』が『聖女』と呼ばれる所以となった『聖魔法』という名の魔法。それは、人間を魔から守る為だけに生み出された魔法であり、純粋な心を持つ者だけが扱える。

そのシスターは私に何度も何度も、繰り返し言い聞かせてくれた。

ここで言う『美しい心』とは、決して幼児のごとき純粋無垢を指し示すものではない。美しさとは純度の事。何処までも直向きに、想いを貫く人間の心こそ美しいのだという。

通常の魔法は魔力を燃料とするだけだが、『聖魔法』だけはその常識から逸脱していた。

何より想いが重要なのだ。

誰かを守りたい。

そういった想いがなければ、『聖魔法』は扱えない。魔から人間を守る為だけに生まれた『聖魔法』とはそんな変わったものであった。

過去の世界で『聖女』と呼ばれ、『聖魔法』を用いて人々を守り抜いた救国の英雄は、何の因果か再びこの世に世を受けた。
そして、家族や知人を魔物と呼ばれる脅威から守りたい――その想いを以てして『聖結界』という『聖魔法』を常に展開し、生まれてからこれまで王国の安寧を守り続けていた。
誰に言う事もなく、当然感謝される事もない。ただただ、自らの善意と、己が『聖女』であるからという理由だけで、何年も『聖結界』を展開し続けていた。
そんな少女――ミレア・フィルドこと私は、何故か非難の視線を一身に浴びていた。
そうされる心当たりなど勿論、一切なかった。
目の前の不機嫌そうな婚約者にどうして睨め付けられているか等、思い当たる節は何処にもない。
今から遡る事十年前。
まだ私が五歳で、物心が漸くつき始めた頃に婚約者が出来た。名をレグス・ベルナンド。彼はベルナンド王国の王太子であった。
一介の侯爵家の令嬢である私が、どうして王太子の婚約者に選ばれたのか。
その理由は、似ているからと聞かされていた。
その昔に『聖女』と呼ばれた女性の面影を私に見たからであると、そう教えられた。絵画や言い伝えに残る前世の私の姿は、どうやら思ったよりも精細なものであったらしい。
加えて、私が生まれてからというもの、魔物の活動が収まり、街に活気が溢れるようになった。この二つの事実が決して偶然であるとは思えない。そう考えた国王陛下がこれは運命であるとして、

『聖女』の面影があるらしい私と王太子の婚約を決めたのだという。
魔物が襲ってこないのは、私が『聖結界』を展開しているからなので、陛下の強引な推理は奇しくも真実であった。
しかし、それももう過去の話である。
「今日、この瞬間を以て僕はお前との婚約を破棄する！！！」
伝えたい事があるからと王太子に呼び出された私は、何故か一方的に婚約破棄を突きつけられていた。
おまけに、これまた何故かこの場に居合わせている王太子の取り巻きからも、威嚇なのかぎろりと睨まれ続けている。
私が一体何をしたのだと、今すぐにでも声を上げて彼らに尋ねたかった。
しかし、それをするより先に言葉がやって来る。憎しみがこもった王太子の言葉だ。
「僕はな、お前のような偽物とは違う、本物の『聖女』の生まれ変わりと出会ったのだ。彼女こそ、僕が愛を捧げるべき女性」
王太子がそう言うや否や、彼の背に隠れていた小柄な少女がひょこっと顔を出す。
どちらかといえば、私は無愛想などと言われる事も多かったのだが、その少女はそんな私とは逆。
例えるならばひまわりの花のような。
そんな、たいそう可愛らしい少女。
それが少女に対する私の第一印象であった。

『聖女』として生きていた頃の私は、何より人の本質を見抜く力を求められた。
『聖女』のみが魔物を消す『聖魔法』を扱える。
今よりも魔物の脅威が身近であった当時の『聖女』は、絶対的な権力として認知されていた。
「貴方は『聖女』という権力を求めて言い寄って来る人間達の本質を見抜き、正しい答えを下さなければならないのです」
それが、シスターの教えだった。
私が身一つで立ったのは、政界という名の魑魅魍魎溢れる魔窟。
私腹を肥やし、保身に走る腐り切った王侯貴族の、どす黒い欲望の礎にされかける事数千回。
お陰で、人の本質を何となく見抜く事が出来るという特技を得てしまったのだが、そんな私の瞳には、これでもかと言わんばかりに、嫌悪の感情が王太子から溢れ出るのが見えた。
――――……嗚呼、本当に嫌になる。
嫌な特技を持ってしまったものだと、私は続け様に胸中で嘆息する。言うなればきっとこれは当て付けなのだ。私に対する彼なりの当て付け。
見たくないものまで見抜いてしまう。
そんな体質に昇華させてくれた元凶たる、いつぞやの貴族共に『ふざけんな』と心の裡で毒を吐いてから、私は再び少女に視線を向けた。
「……お名前を、伺ってもよろしいですか？」
「メレアよ。メレア・レイカント」

その名前に心当たりは――一つ。
「レイカント公爵家の方でしたか。これは失礼致しました」
レイカント公爵家。
それは王国四大公爵家の一つであり、多くの魔法師を輩出してきた名門中の名門。
現在王宮にて魔法師長の座についている人物も、確かレイカント公爵家の人間であった筈だ。
「いえいえ。構いません事よ。わたくし達の間に面識がなかったんですもの。知らないのも当然だわ」
私の生家であるフィルド侯爵家は王国領の最西端に位置し、一部からは辺境貴族なんてあだ名が付けられていた。
故に王都に居を構える貴族とは交流が薄く、その上確か、
「お身体は大丈夫なんですか？」
「あら、よく知ってるのね」
レイカント公爵家の嫡女は病弱であると有名であった。だから、王都暮らしであっても、私と彼女が今日この瞬間まで一度も面識がなかったのは、別段おかしな事でもなかった。
「ええ。身体はこの通り」
そう言ってメレアは、右の足を軸にくるりと一回転。
「もう何処も問題ありませんわ」
花咲くようににこりと笑う。

それは何処か作り物めいた、綺麗な微笑みだった。
「それは良かったです……ところで殿下。どうしてメレアさんが『聖女』の生まれ変わりであると分かったんですか？」
僻みでも、妬みでもなく。
この発言は単純に興味からやってきたものだった。私のように『聖女』として生きた記憶でもあったのだろうか。
だとすると、彼女は私の前か、それとも後に『聖女』として生きた人物なのだろうかと、人知れず思考を巡らせていると、
「彼女はな、治癒の魔法を扱えるのだ」
そんな王太子の言葉がやって来た。
治癒の魔法。
それは『聖魔法』の派生として挙げられる魔法の一つ。
ただし、決して『聖女』のみが扱えるものではない、と私は知悉していた。だが、鼻高々にする王太子に向けて今それを言ったところで、出鱈目だなんだと一蹴されるだけだろう。だから私はあえて口ごもった。
「そうですか、治癒の魔法を……」
口では感心している雰囲気を醸し出したものの、それはただの上辺だけのもの。
しかし、王太子が『聖女』の生まれ変わりと呼んだメレアに対しては、興味があった。

それは、彼女に是非とも聞いてみたい事があったから。
もし本当に、彼女が『聖女』の生まれ変わりであるのならば、私が終生悩まされてきた疑問に対する答えを知っているのではないか。
どんな答えにも納得出来なかった私を、得心させてくれる答えを持ち合わせているのではないか。
そう思ってしまったが最後。
私は無意識に開口し、言葉を発してしまっていた。
「メレアさん」
「何ですの？」
「貴女にとって、守りたいもの……いいえ、守らなきゃいけないものって一体何ですか」
「……どうしてそんな質問を。と、お聞きしても？」
私の質問に対して訝しみながらメレアが言う。
突拍子のない質問である。
その自覚は誰よりも持っていた。
でも、それでも尚、聞かずにはいられなかった。そして、その問いに対する答えを知りたかった。
だから、彼女に答えてもらえるようにと、私は無理矢理に理由を付け足した。
「昔、とあるシスターから教わったんです。『聖女』とは、何かを守る存在である、と。偶然の産物でしかありませんが、これでも『聖女』だなんだと騒がれた事のある身でして。そういった知識がついてしまったんです」

そのせいで王太子との縁談を纏められるわ、周りから敵視されるわ。私からしてみれば不利益を被った思い出しかない。
だからと言って嘆く気はなかったけど、まさしく散々と言えるものであった。
「ですので、一度聞いてみたかったんです。『聖女』と名乗る方が何を守るべきであると考えているのか、を」
王太子がメレアこそ『聖女』だと言い、彼女もそれを否定はしない。
ならば、メレア自身も、少なからず己が『聖女』であるという認識を持っていると捉えて間違いないだろう。
だから聞いておきたかった。
ミレア・フィルドとして生を受ける以前。
気が遠くなるほど昔――過去のこの世界にて、『聖女』と呼ばれていた頃の自分が終生、見つけられなかった問いかけの答えを。
今は惰性で王国全体に『聖結界』を張り続けているけど、それは間違ってもずっととはいかない。
何故なら、私にも限界があるから。最近ではその綻びが見え隠れしており、王国全体を『聖結界』で覆うなんて馬鹿げた行為は、最早限界寸前であった。
いつかその事について誰かに話を切り出そう。
そう思っていた矢先に、コレである。
私からすれば僥倖としか言いようがなかった。

納得のいく答えを得られる上に、この窮状すらも何とかする事が出来るかもしれない。その予感が私にはあったから。

「私は……分からなかったんです。誰を守りたいか。そう尋ねられたならばちゃんと答えられます。それはシスターであったり、家族であったり、友人であったり、と。けれど、『聖女』として私が真に守らなければならなかったのは、一体何だったのか。何よりも優先して守るべきもの。取捨選択を迫られた時、選ぶべきもの……それが、分からなかったんです。分からないのです」

『聖女』という存在に縋る人間。

一縷の希望を求める人々。彼ら全てを救う。

それが一番だろう。けれど、それは不可能であると、なまじ『聖女』として生きてきたからこそ分かってしまう。もし仮に、そんな事が出来る者がいるとすれば、神と呼ばれて然るべき存在だろう。

人の身には、限界がどうしても付き纏う。

どうしても、取捨選択を迫られる。

『聖女』と呼ばれ、称えられながらも、守る人間は選ばなければならない。そう思うたびに私は身を切られるようだった。結局私は、どうすれば良かったのか。何を守れば良かったのか。その答えを得られなかったからこそ、こうして無茶な生き方を押し通してきたとも言える。

私は答えを求めていた。

終生悩まされたこの問いに対する答えを。

しかし。

「……何を、言ってるの？」

意味が、分からない。

そう言わんばかりに惚け、メレアはぽかんと立ち尽くしていた。

ただ、私が冗談や酔狂で質問したのではないと本能的に察したのか、嘲る事はしなかった。

「『聖女』の生まれ変わりと呼ばれるメレアさんならば、その答えを知っているのではと思いまして」

それが、私の口が閉じてくれなかった最大の理由。けれど、そんな私の願いを邪魔して割り込む声が――一つ。

「……何を馬鹿な事を言ってるんだ。そもそもお前は、『聖女』なんかじゃない……っ！　『聖女』を騙った偽物だろうが!!」

それは、王太子の声であった。

「守りたかった？　『聖女』として？　分からない？　……はっ」

彼から向けられたのは侮蔑の感情。

此方は至極真面目に尋ねているにもかかわらず、こうも鼻で笑われては流石の私もムッと眉根が寄った。

「妄言も其処まで行くと笑うしかないな」

そう言って王太子は、空いていた私との距離を詰めてくる。

「父上に『聖女』だなんだとこじつけで持て囃されるうちに、自分が真に『聖女』とでも思い込んでしまったか？　ならば、憐れと言う他あるまい」
……きっと、言い訳をしたところで信じてもらえないだろうけど、己が真に『聖女』である、と私が思った事など、一度としてない。
何もかも迷走し、結局、『分からない』という答えにすらならない答えしか導き出せなかった私風情が、真に『聖女』であるなどと、思った事すらない。
だからこうして問うているというのに邪魔をしないでくれ。そう思って睨み付けると、王太子はそれを曲解でもしたのか、嫌味を重ねてくる。
「仮初めの地位は心地好かったか？　そうだろうそうだろう？　さぞ、気分が良かった事だろうな。何せ、僕の婚約者という地位は羨望の的だろうからな」
棚ぼたで手に入れた地位に固執する醜い奴だとでも思っているのだろう。
けれど、不思議と不快感はなかった。
その理由はきっと――慣れていたから。
言いたい事があるなら好きなだけ言えばいい。
貶して満足するなら好きなだけ貶せばいい。
そうやって受け流してきた私だから、神経を逆撫でしようとする王太子の言葉を、表情筋をぴくりとも動かさず聞きに徹する。
しかし、その態度こそが何よりも王太子の癇に障ったようだ。

「……何か言ったらどうなんだ」
青筋を浮かべ、目を怒らせて彼は私にそう言った。渦巻く感情を隠そうともしない様子が、彼の胸中をありありとあらわす。
「……」
けれど私は閉口状態を貫く。
経験上、こういう時には何を言っても逆上される。そう思ってあえて無言でいたのだが、直後、乾いた音と共に、頬に鋭い痛みが走った。
「――――っ」
パァンッ、と響く破裂音に似た音の正体は――平手打ち。私の頬はじんじんと疼く。
「答える気がないならもういい。お前という存在が不快だ。今すぐ消え失せろ道化がッ！」
「殿、下……っ！」
いくら何でも手を出すのはやり過ぎだ。
そう諌めようとでもしたのか、メレアが慌てて私と王太子の間に割って入ろうとするが、視界にも入れたくないと言わんばかりに、既に王太子は私に背を向けていた。
相当機嫌が悪いのだろう。
歩く姿からもその怒気が目に見えて感じ取れる。慌ててその後を追うメレアの姿を見詰めながら私は、
「答え……聞きそびれちゃった、な」

ポツリと言葉を呟いた。次いで慚愧の念に襲われ、目を伏せながら、
「でも、ま、ぁ、この曖昧な関係も、潮時だったんだろうね」
右の手を、まだじんわりと痛みが広がる頬――ではなく、口元に運んだ。
国王陛下に『聖女』の生まれ変わりだなんだと持て囃されて、いつの間にか婚約者に指名されて、半ば無理矢理に『聖女』だと周囲からも言われて。
けれど、私はそれでも『聖女』として何を守りたいのかをはっきりと自覚しないまま、『聖結界』を張り続けていた。そんな事をしたところで、結局限界に見舞われる事なんて初めから知ってたのに。
「ああ……」
口の中で不意に鉄の味が広がった。
当てていた手を離すと、手のひらにはドロドロとした鮮紅色の液体が張り付いていた。
『聖結界』とは、『聖女』と呼ばれた人間のみが使う事が出来る奇跡の魔法。
しかし、それは決してリスクなしに行えるものではない。
奇怪な力には必然、奇怪な代償が付き纏う。それは避けられぬ運命。
永劫不変の等価交換の真理だ。
「少し……無理し過ぎた、かな」
どっ、と吹き出した倦怠感に身を歪めながら、私は王太子達とは反対方向へと歩き始める。
どうせ、私の居場所は近いうち、王都から失われる事だろう。

叶うならば、それでも関係ないと言ってやりたかったが、私の周囲の者達にいらぬ迷惑を掛けてしまう事になる。
だから、王都からは出て行かなきゃいけないかな。
なんて思いながら、私はまたしても掴み取れなかった答えの『遠さ』を実感し、気落ちしながらも帰路につくのだった。

2話

記憶は、曖昧だった。
王太子と別れ、帰ろうとしたところまでは覚えている。なのにどうしてか、それから先の記憶が、まるで抜き取られでもしたかのようにすっぽりと頭の中から消えていた。
「――――ッ」
その不測の事態を理解するが早いか、がばっと上体を起こし、慌てて周囲を見回した。
「……わたしの、部屋……？」
そこは、王都にあるフィルド侯爵家の別宅の一つ。視界には、私が私室として使用している部屋の風景が広がっていた。
「お目覚めになられましたか」
――――ミレアお嬢様。

私の名を呼ぶ声が聞こえる。
よく、知った声だった。
「……レイン」
彼の名は、レイン。
銀糸のような長い髪を後ろに纏めた、中性的な相貌の男性使用人であった。
「一言、申し上げさせて頂きますが……私は何もしておりませんよ」
「……私はまだ何も言ってないと思うんだけど？」
物言いからして、レインは何かを知っているらしい。
言葉の続きを待っていると、私を見詰める彼の眉根が、何故か若干寄っている事に気付く。どうしたのだろうか。
「……やはり覚えていらっしゃらないのですね」
「覚えて、ない？」
「ええ。貴女様は、屋敷に着くや否や、血を吐いて倒れたのですよ」
「……」
倒れる心当たりはあった。
『聖魔法』とは想いの魔法だ。
『守る』為の、魔法だ。
何かを守ると決めて、人々に信じてもらって、その果てに『聖魔法』は機能する。

あまりに単純。しかし、単純な仕組みであるが故に、小さな綻び一つでいとも容易く崩れ去ってしまう。
元より分を弁えない魔法であった。そもそも、私は無力な人間であったのだから。
……結果がこの様だ。
血反吐を吐いて倒れた。
ああ、うん。その状態に私は前も一度陥った事があった。だから、心当たりは十分だった。
「何があったのかと、聞きたいところではありますが」
聞かないでおいてあげましょう。
と、決して言ってくれないのがレインという人だ。長年の付き合いから、そんな事は百も承知である。けれど、それは心配からくる感情であり、行為。だから、私も強く咎める気はなかった。
「貴女様は答えてはくれないでしょう」
そう言ってレインが私に差し出したのは、一枚の紙。
「ミレアお嬢様が眠っておられる間に医師を手配致しました。これは、その医師からの診断書となります」
突き付けられた紙に視線を向ける。
病名の欄には――『急性魔力欠乏症』と書かれていた。加えて、その真下に、『下手をすれば貴女は命を失っていた事だろう。無茶はやめろ』と、そう書き殴られている。乱暴な筆跡は怒りを示しているようだ。

限界まで身体を酷使して漸く王国全体に『聖結界』を張れていたのだ。
ただでさえ心許なかった支えが一つ失われる。その結果どうなってしまうかなぞ、火を見るよりも明らかであった。
「バンハード、か……」
診断した医師の名前の部分には『バンハード』と書かれている。
「よく、あの人を呼べたね」
それは、世界一の名医として知られる人間の名であった。
誰かを救い、名声を高めた彼にとって、私の限りなく自殺に近い行為は、不愉快以外の何物でもなかった事だろう。こうして書き殴られているのも納得がいく。
「……ええ。条件付き、ではありましたが」
そう言って目を伏せるレインからは、後悔とも取れる感情が漏れ出ていた。
どういう事だろう、と私が小首を傾げるより先。
ドアの向こうから、見慣れない人物がやって来る。
「――治療の報酬として、オレはあんたとの対話を望んだ」
想像よりもずっと、若い声。
部屋に入ってきた男の人は、きっと私と年の頃はそう変わらない。
「巷で噂の偽聖女さんに是非ともオレは聞いてみたくてね。なあ、あんたは一体……そんなボロボロの身体になってまで、何がしたかったんだ？」

「……どういう、事でしょうか」
言っている意味が、私には分からなかった。
そもそも、何故バンハードが私に興味を持っているのかも、目が覚めたばかりの靄がかった頭では上手く理解出来ない。
「どうもこうもねえよ。オレは医者であんたは患者。だからオレは医者として聞いてんだ。そんなボロボロの身体になってまで一体何がしたかったのか、ってな」
「……なる、ほど」
「一応言っといてやるが、誤魔化しはなしだ。あんたの壊れ具合が数日やそこらで至るようなもんじゃねえって事は、診たオレが誰よりも知ってる。その上での質問だ。魔力を限界まで酷使して……あんたは何がしたかったよ？」
確かに、この名医相手に下手な言い訳でやり過ごす事は無理だろう。
……でも、どうせ正直に言ったところで、私を除いて誰にも理解は出来ない筈だ。
そう、思ったが……いや、そう思ったからこそ、私は彼に馬鹿正直に答える事にした。
「守りたかったんです……漠然とした何かを」
「……あん？」
彼は私の言葉に気色ばむ。
そりゃそうだろう。はっきりしない何かを守る為に自殺に近い行為を敢行していたのだと言われれば、誰もが顔を顰める。医者である彼ならば尚の事。

「守り続ければ『答え』を得られると思った。たとえ得られないにせよ、守る事は私の『役目』であり、『願望』であり……それが私の『存在意義』ですらあると思っていました。だから、こうする事に何の躊躇いもありませんでした」
「……待て待て。あんたは何を言ってる？」
「誤魔化すなと仰られたので正直に言ったまでですが？」
「……そうかい。随分と性格の悪い患者だ。まあいい。ならば、オレなりに解釈をさせてもらうとするかね……続けてくれ」
私の言葉に嘘偽りはない。
けれど、他人には分かり得ない独り言だ。どうして私が限界まで『聖結界』を張り続けていたのかなぞ、前提情報を知らなければ、どう知恵を働かせたところで辿り着ける筈もないから。
「何がしたかったのかと問われれば、私は『答え』が知りたかったからと言う他ありません」
「答えが、知りたかった？」
「こうして、惰性でも守り続ければ『答え』を知る機会にも恵まれる。そう思っていたから、こんな無茶も続けられたんでしょう」
誰かの共感を得られる理由なんてものは、何一つとして存在しない。
ただ、私は己と約束してしまった。守ると誓ってしまった。
私が救わずして誰が救えるんだと思ったから。
とどのつまり、究極の自己実現欲求を満たす為の行為であった。そう言い表す事も出来るだろう。

「とはいえ……こうして限界が来てしまう事も承知の上でしたが、また何も得られず終いでした」
後悔はしていない。
やらなきゃ良かった。そんな感情も抱いていない。
ただ……少し気落ちしてしまっただけ。
悲しくなった、だけ。
「心配せずとも、もう無茶はしません……というより、これまで通り、なんて事は出来ませんし」
「……どういう事だ？」
「バンハードさんがこの部屋に訪れた際に言った言葉こそが答えですよ」
「オレが、言った言葉だと……」
眉根を寄せてバンハードが考え込む事数秒。
己の発言を遡り、そして答えに辿り着く。
「――偽、聖女か？」
はっ、と目を剥く彼の声はどうしてか、僅かに震えていた。
――巷で噂の偽聖女。
バンハードは別段気にした様子もなく『偽聖女』と口にした。大方、あの王太子が触れ回った、といったところだろうか。
『聖魔法』とは想いの魔法。何処までも想いに左右される魔法であった。
私自身の想いが重要である事は言わずもがな、守られる側の想いもまた然り。

今まで無茶が出来たのも、民草が私を『聖女』であると信じて疑っていなかったから。私自身もそれに応えようと奮起していたから。
その二つが合わさって漸く、あれほどの無茶を続けられていた。
誰も知覚していないだろうが、私だけは分かる。私が張り続けていた『聖結界』はその機能を失いつつある、と。
バンハードは、私が『聖魔法』を使っていた事までは分かっていないだろうが、人々が私を『聖女』と認識する事が必要なのだと理解したようだ。
「ええ。『聖女』でなくなった私には、もうそれに伴う責務も全う出来ません」
「待、て。じゃあなんだ、あんたは一人で、『聖女』としての役目を己なりに果たそうとしてたってか？　そしてその答えがコレだと？　こんな自己犠牲があんたにとっての『聖女』であると？」
自己犠牲。
そんな負の意味がこもった一言に纏められたくはなかったけれど、分かりやすく表すならば、一番適した言葉だろう。
「『聖女』であるから誰も彼も守ろうとする。それって……自己犠牲なんですかね？」
私自身は、それが自己犠牲であるとはこれっぽっちも思っていなかった。
だから苦笑を浮かべながら問うたのだけれど、返ってきたのはそれへの回答ではなかった。
「……ミレア・フィルド」
改まって名を呼ばれる。

「結局あんたは、一体何をしていた……？　……あんたなりの理由があって漠然とした何かを守ろうとしていた。守りたかった。それは、理解した。だ、が……不特定多数の人間を、あんたは一体どうやって守ろうとしていたんだ……？」
嫌な予感でもするのか、バンハードの顔色は酷いものだ。
きっとこの時、真実を言わなければ良かったのだろう。でもそうはしなかった。
『聖女』として当然の事をしていたまでだし、それに、嘘はつきたくなかった。
「信じるのも信じないのも貴方の自由ですけどね」
そう前置きをする。
「膜を、張ってたんです。薄い膜を王国全体に。私は『聖結界』だなんて呼んでましたけど」
「膜、だと……？」
「魔力がすっからかんなのはそのせいですよ。まぁ、慣れたものですけどね」
王国全体に『聖結界』を張っていた。
巷で噂の『偽聖女』からそんな話を聞かされたところで、って話ですよね。そう補足しようとして、バンハードに何故か、がっ、と力強く胸倉を掴まれた。
「あんた、自分が何やってたのか分かってんのか……!?」
激情に駆られた声。怒りを孕んだそれは、彼の感情を余す事なく表現していた。
何が起こったか分かっていなかったのか。数秒ほど後、漸く事態を把握したレインから『ミレアお嬢様ッ!?』という悲鳴に似た声が上がった。駆け寄ってこようとする彼を、私は手で制する。

少なくとも私から見て、バンハードから敵意は感じられなかったから。
「王国全体に膜を張っていただ……？　『聖結界』だ……？　ああ、嗚呼、なるほどな……っ。その言葉が本当なら、魔物が王国の周囲一帯から忽然と姿を消したって話も頷ける。真偽を確かめる術はオレにはねえ。でもそれが嘘でない事くらい直感的に分かっちまう。だが、な……ッ」
言葉は止まらない。
「そんな命を削る自己犠牲を見せつけられて、一体誰が救われるんだよ……ッ」
魔力を限界まで使い続ける行為は身体にとてつもない負担をかけ、それは――寿命を縮ませる事に繋がってしまう。
それは医者であるバンハードには、当然の常識なのだろう。だからこうして、命を粗末にする私に対して怒り狂っていた。

3話

「みんなが、救われます」
胸倉を掴まれた状態のまま、私は言う。
それが正しいと微塵も疑っていませんとばかりに、堂々と言ってやる。
「それは私が守りたいものではなかったかもしれません。だけど、その行為は紛れもなく誰かを救うものです。だからこそ、その行為は正しい。『聖女』だからこそ、それは正しいし、それに殉じ

なくちゃいけない。私はそう思います」
「あん、た」
「バンハードさんがどうして怒ってらっしゃるのか、努めれば私にも理解出来る事でしょう。だけど、私は理解したくない。何処までも拒みます。何故ならその価値観は『聖女』とは相容れないものだから。その価値観は『光』として映らないから」
『聖女』とは、弱き者が縋れる最後の砦。
『聖女』は人々の希望でなくてはならない。
それは決して偶像ではなく、確かに存在するまばゆい『光』でなくてはならないのだ。
何を救えばよかったのか。何を救いたかったのか。守りたかったのか。分からない事だらけの私だったけど、それでも分かる事はある。
『聖女』という存在は、何かを救い続けなければならない、と。『聖女』という肩書きは、希望の象徴である、と。
「私自身は自己犠牲、というより『聖女』なら当然の行為だと思っていますが……そうは思わない方も多い事でしょう」
その最たる例がバンハードだ。
自分の命を粗末に扱い、その犠牲を以て誰かを救う。言い方を変えれば、押し付けの善意とも言えるかもしれない。そのあり方が絶望的に彼とは相容れなかったのだろう。
「ですが、私は間違いだなんて思った事は一度としてありません。迷いこそすれど、一度も」

「……その結果、『偽聖女』と呼ばれたとしてもか」
「そうですが？」
私が『偽聖女』と呼ばれているならば、その代わりとなる本物の『聖女』がいる筈だ。
あの王太子だって言っていた。彼女こそが本物だ、と。
だったら、その人がきっと代わりの『光』となるべき存在であるのだろう。
たったそれだけの話。
決して誰かに称えて欲しいから始めた行為ではない。
『偽聖女』なんて巷で呼ばれてるそうですけど、それは一部の声でしょう？　全員の声でないのなら、それだけで私がやっていた事に価値があったのだと思えます。『聖女』とは最後の砦。助けて欲しいと願われたならば、たとえ今であっても私は助けますよ。それが『光』というものですから」
私にとっての『聖女』とは、そういう存在であった。だから漠然とした何かを救い続けてきたし、その行為に疑問は抱かなかった。
疑問に抱いていたのは救う行為そのものではなく、〝『聖女』は何を救うべきなのか〟だ。
力が足りず、救う相手を選ばなければならない私であったからこそ、その問いに向き合い、そして納得のいく答えに辿り着く必要があった。
そんな事を考えているうちに、気付けば、バンハードは胸倉から手を離していた。
「だとしても、あんたの幸せは何処にある……」

「……変な事を聞くんですね」
まるで私が不幸だと決めつけるような言い様に、少しだけカチンとくる。
だけど、私にとっての幸せなど、実際に経験してみない事には分からないか、とすぐに頭が冷えた。
「バンハードさんは、王都を歩いた事はありますか？」
そんな当たり前の質問を私が一つ。
「……あるに決まってるだろ」
「でしたら一度くらい聞いた事はあるんじゃないですか？」
――楽しそうな声を。
そう言うと、ピタリと彼の表情が硬直した。
「魔物に襲われていたならば、あんな声は聞こえてきません。たとえ私の行いが押し付けであれ、それによって幸せを迎える人が多く生まれてくれる。私には、そう思える」
それが私の全て。
生き甲斐であり、守り続けていた理由。
私は好きなのだ。守って、守って、守り続けて。その果てに、幸せと思える瞬間が溢れている。
その事実こそが。
『聖女』と呼ばれていたからこそ、あの瞬間に誰よりも価値を見出す。
「――――何よりそれって凄く素敵な事であると、思いませんか」

人がいるから世界が輝く。
だから私は、全てを救いたかった。
「……医者とは『人』を救う存在。『聖女』とは『全て』を救わなければならない存在」
――案外、私達って似た者同士なのかもしれませんね。
私にとってそれは、何気ない一言。
けれどどうしてか、バンハードの表情は悲しげに歪められた。
「救わなければならない、だと？」
言葉にはじんわりと複雑な感情が滲んでいた。
「当然でしょう？」
向けられる感情はやはり、怒りに近い。同時に、同情めいたものも感じ取れる。
それがどうしてなのか、私には分からなかった。だから、もう一つ尋ねる事にした。
「バンハードさんは……『上』を見た事はありますか？　国の上に位置する方々を。権力塗れの魔窟を」
ミレア・フィルドとしてはまだ一度もないけれど、どの時代、どの世界においても権力に溺れる者がいるのは共通だ。彼らが己の権力を『免罪符』として扱うが為に腐敗は横行し、そして横溢する。
「……ある」
「ですよね。バンハードさんは、超が付くほどの名医ですもんね」

国で一番の名医と呼ばれる――バンハード。
彼クラスならば、いち貴族家に留まらず、王宮ですら何度か出入りした事があるやもしれない。
実際、前世の私もその道を辿った。
「一人でいい。誰か一人。誰か一人でも、飢えに苦しむ民に手を差し伸べようとする方はいましたか？　自己の利潤を無視して誰かを助けようとする貴族はいましたか？　彼らの目は今を苦しむ民に向けられていましたか？」
誰も彼もを救い、幸せな世界を築き上げたい。私は決して、そんな大それた事は望んでいないし、私程度の力では無理に決まっているとずっと前から割り切れている。
「……いないですよね」
「……」
沈黙を貫くバンハード。
何も言えない。それが、彼の答えだった。
「国の上の方々に見捨てられたそんな彼らが、唯一の光を求めている。『聖女』に縋っている。だったら、助けなくちゃいけないじゃないですか。救わなきゃいけないと思いませんか？　『聖女』だからこそ、私が手を差し伸べなきゃいけないと、貴方は感じませんか？」
「……あんたがそうまでして救ってきた連中は、その苦悩と慈愛を虚仮にして、今まさにあんたを『偽聖女』と嘲っている」
悔しくないのか。

怒らないのか。
ふざけるなと、なんで叫ばないのか。
どうして今も尚、そんな思考が出来るのか。
彼がそんな事を考えているのは手に取るように分かった。私は小さく笑う。
「それはつまり、彼らの救いは別の場所にあったという事でしょう？　なら怒る筈ありません。憤るつもりもありません。そもそもあの救いは一方的な押し付けでしたし、ね。『聖女』として私は一体、何を救えばいいのか。そんな疑問の答えを見つける為の、善意の押し売りにしか過ぎませんでしたから……勿論、感謝されるのは好きですよ？　これでも一応、『聖女』と呼ばれていた身ですから」
悲しげに歪められたバンハードの瞳が私を射抜く。その視線が、どうしてそんな考えに至れるのかと、私を責め立てているように思えた。
「私には、これしか出来なかった。だから、必死にその行為にしがみついていただけです。結局のところ、私がしたかったのは、『救い』と『答え』を見つける事でした」
だけど、結局その『救い』は中途半端。
『答え』も見つけられず終いで終わってしまった。
きっと、『偽聖女』である私は、もう王都にはいられないだろうから。
「まぁ、元々私ってそんなに『聖女』に向いてませんでしたしね。収まるべき場所に戻った、って言うんですかね。これって」

『救う』力は中途半端。そして誰かに意見をする度胸も力もない私より、『聖女』らしい人なんかきっといっぱいいる。
だから、そうやってすぐに割り切る事だって出来た。
「ここだけの話。私ってシスターに憧れてたんです」
ちょっとだけ茶目っ気を出しながら、難しい顔で沈黙するバンハードに向けてそう言う。
場を和ませようと思っての発言だけど、決して嘘ではない。シスターになってみたかったというのは紛れもない事実だ。
「恩人の一人が教会に勤めるシスターをやってて。その姿にいつの間にか憧れちゃってたんですよね」
元々、『聖女』よりシスターになりたかった。
誰かを導ける人間になりたかった。
それでも私が『聖女』であり続けたのは、シスターの教えがあったから。
貴女に出来る事をやり続けなさいと言われて育ったから。だから、私にしか出来ない『聖女』であり続けていたのだ。
「実家に戻ったら、シスターのお仕事でも学んでみようかなって思ってるんです。私がシスターって……似合いますかね？」
『偽聖女』だなんて随分と縁起の悪いあだ名がついちゃったけど、『聖女』を免職されたなら、ちょっとばかしやりたい事でもするかなあ。なんて思っての発言だったのに、どうしてか一向に返

事がなかった。
「ていうか、レイン涙ぐんでるの？　急に泣き出すような癖でもあったっけ？」
「……目にゴミが入り込んだもので」
「何それ。変なの」
バンハードをよそに、勝手にぐすぐすと泣き始めていた使用人の姿にジト目を向けると、そんな言葉が返ってきた。変な奴だ。
「……似合ってる」
私がレインと軽口を交わした後に、漸くバンハードの喉から絞り出されたのは、その一言だった。
「……悪かったな」
続けざまに謝罪される。
「何がですか？」
「いや……オレは色々あんたの事を誤解してたらしい」
彼はぽりぽりと軽く髪を掻きながら、ばつが悪そうに目を伏せる。
「……あぁ。別に謝って頂く必要なんてなかったのに。多分それ、誤解じゃありませんし」
私とバンハードの価値観の違いが、先程までの口論の根本にある。
きっと彼が言いたいのは、命を粗末にするなという事。実に医者らしい信念だ。そして、多分私はそれに反しているんだと思う。
彼の言葉は何も間違っていない。

「誤解かそうでないかは、オレが決める。オレが誤解と決めたんだ。だったらそれは誰に何を言われようとも誤解だ」
「……強情なんですね」
「医者だからな」
何が医者だからなのか、と普段であれば思っただろうけど、その時の私は何故かなるほどと納得してしまった。
思わず納得してしまうほどに、この時の彼の言葉は説得力に満ちていたのだ。
「……先一週間は魔力を使うな。また倒れる事になるぞ」
そう言いながらバンハードは私に背を向けた。
話は終わり、という事なのだろうか。
言い終えるが早いか、彼は出入り口のドアへと歩み進めていたのだが、ドアノブに手をかけたところで、ぴたりと動きを止めた。
「あんたは領地に帰るんだっけか」
「王都に私の居場所はもうないでしょうしね。このまま留まっても迷惑を掛けるだけになると思うので、帰る予定にしてますが……」
それが何か？　と小首を傾げると、意外な言葉が返ってきた。
「なら、ひと月後にフィルド侯爵領に向かわせてもらう」
「……？　何か用でも？」

キョトンとした表情で首を傾げたまま、そう問い返す。すると何故かバンハードは半眼で呆れたと言わんばかりに、
「……あんたの診察だ」
そう口にし、私は漸く理解に及んだ。
「流石は王国一の名医。アフターサービスも良いんですねえ」
「馬鹿言うな。こんな危なっかしい患者を放っておくと、おちおち寝てもいられないだろうが」
「あれ？　私ってそんなに危ないですか？」
「……せめて自覚はしろ」
年齢が近いからか、私にとって彼は随分と話しやすい人だった。先程の緊迫から一転、すっかり和んだ空気にあてられながらバンハードは言う。
「あんたも随分と元気になったようだし、オレはここらでお暇させてもらう」
そして最後に一言、
「お大事に」
それだけ告げて、部屋を後にした。
やっぱり名医だから忙しいのかな？　なんて考えながらも、すぐ側に立って控えていたレインに焦点を合わせ、私は相好を崩す。
「ねえレイン」
「……なんでしょうか」

「人って、難しいね」
バンハードと話をして、懐古して、自分のあり方を、考えを口にして。そうする中で思った感想であった。
「……そう、ですね」
同調する声が聞こえる。
けどその声は、何処か悲しげなものだった。

4話

――――その日の夜。私は夢を、見た。
ずっと昔の、灰色に塗り潰された夢を、私は見た。
私が『聖女』であろうと誓い、『聖女』としてがむしゃらに生き抜いた頃の夢。
矮小な心を容赦なく叩き潰し、蹂躙していたあの頃の記憶を。
誰も彼もを救う。それが生涯かけて行うべき事と知りながら、私という『聖女』は無力でしかないと思い知らされた頃の夢を――。
辛くて、悲しくて、苦しくて、咽び泣いて。
真に何が答えなのか分からないまま救おうと足掻いた過去の記憶が、交錯する。
決して手の届かない夢の世界。そんな泡沫の世界で私は――耐え難くも、それでも幸せだった頃

の思い出を、幻視した。

＊　＊　＊　＊

「――――」

立っていた。

じっと、礼拝堂の中で私は立ち尽くしていた。

美しくも何処か儚い偶像を前に、私は懐古していた。

「礼拝は済みましたか、ミレア」

カツカツ、と石造りの床に響く足音。

今生と変わらぬ過去の名前に私は反応を見せ、声のした方へと顔を向ける。

そこには黒と白が基調となった修道服の女性がいた。そして私は声を上げる。

「シスターメリッサ」

彼女の名はメリッサ。

この礼拝堂を管理する修道女である。気品溢れるメリッサのその立ち姿は、何処かのご令嬢を思わせるようなものであった。

「礼拝は、今し方終えたところです」

「そうですか」

淡白なやり取りをし、メリッサはそのまま歩みを止める事なく、私のすぐ側まで歩み寄る。

「主は全てを御覧になられています……と、誰もが言いますが、それは果たして本当なのでしょうか」

視線は設えられた偶像に向けたまま、メリッサが唐突にそう、ひとりごちた。

「知悉しておられるならば、どうして戦争が終わらないのです。どうして貧富の差はなくならないのです。どうして、こうも辛い世界が生まれるのですか」

神に仕える者だからこそ、疑いたくはない。けれど、全知全能の神ならば、何故この現状を救ってはくれないのだろうか。どうして、この凄惨な現実を見過ごしているのか。そう疑問に思わざるを得なかったのだろう。

「主から与えられた試練であると、誰もがかく語ります……ですが、それは本当に試練なのでしょうか。耐え難い苦痛を味わい、苦しんで悲しんで痛んで泣いて。そうせざるを得ない状況が真に試練であると？」

悲哀に塗れた声音で彼女は言う。

詰め込めるだけ詰め込んだ感情の奔流が、言葉と共に流れ出ていた。

「貴女は……どう思いますか。ミレア」

「私が、ですか」

「ええ。貴女がどう思っているのか。それを私に聞かせては貰えませんか」

シスターでこそないが、私も礼拝をする身。

形だけではあるけれど、信仰する神を貶(おとし)める事は言いたくない。でも、
「……縋るべきではないでしょう」
「それは主に、ですか？」
「はい」
私は、救われた人間だ。
死の狭間(はざま)から救い出された人間。
だけど、私を救ってくれたのは神でも、血の繋がった家族でもない。
「救いたいと望むのなら、この腐った世界を変えたいならば……私達自身が救える存在になるべきだと考えます。自分の手で救うしかないと思っています」
少なくとも私は、神様ではなく一人の女性に救われた。飢えに苦しむ孤児を救おうとするシスターメリッサによって、私という人間は救われたのだ。
「それでは、貴女自身が神にでもなると？」
「……いえ。そんな大それた事は出来る筈がありません。でも、シスターメリッサに救われた私だからこそ……今度は私が誰かを救いたい」
神も権力者も。
誰も手を差し伸べないならば、私が代わりにすればいい。
私が代わりに、彼らの光になればいい。
「私を含め、誰もが手を伸ばしているんです。助けてくれと。救ってくれと。だから私は、その手

を取れる光となりたい」
一人ではどうにも出来ず、他人の手すら取る余裕がない。かつての私がそうだったように。その気持ちが痛いほど分かる私だからこそ、光になりたかった。
きっとこの時この瞬間こそが、私が『聖女』を目指すに至るキッカケであったのだ。
孤児(こじ)として生き、シスターメリッサに救われ、こうして人間らしく生きる事が出来ている。
誰かに救われた私だからこそ、光となるべきであった。そしてその『光』である限り、私は救おう。
誰も彼もを救ってみせよう。それはただの自己満足でしかないのだとしても。
僅(わず)かに笑い、私は偶像を仰いだ。
神様のような全知全能には、どう頑張ってもなれないだろう。けれど、そんな私でも出来る事はある筈だ。
痛みを、辛さを、悲しさを、苦しさを。
その全てを知る私だからこそ、誰よりも弱者の気持ちが分かる。救って欲しいと手を伸ばす者の気持ちが。これは傲慢(ごうまん)だ。傲慢だけど、それでも。
私が救おう。
私が助けよう。
私が守ろう。

私が手を取ろう。

何故なら私が、

――『光』でありたいと願ったから。

小さく、儚く、薄く、暗く。

私の存在を『光』として表すならば、きっとそんな言葉が羅列された事だろう。

まだ曙光すら射していない夜更け。

そんな中途半端な時間に目を覚まし、夢の世界を後にした私は、上体を起こして数時間前のバンハードとのやり取りを思い返していた。彼は私を終始奇異の視線で見つめ続けた。その光景が脳裏にありありと映し出される。

言葉にこそされなかったが、私の考えや感情が理解の埒外であると、目が口ほどにものを言っていた。

人は、己が理解出来ない事柄に直面した際、何よりも優先してその『異常』を理解しようと試みる。『異常』である事に答えを求めたがる。己の価値観に基づいた答えを出そうとして、けれど答えは出てこなくて。

だから、きっと彼は憤ったのだと思う。

「共感は、求めてないんだよね」

この生き方。この思考。この価値観。

共感する事は素晴らしい。理解し、言葉を尽くして語り合う。誰もが誰もを尊重して思いやる。それは何よりも称揚されるべき行為だ。

けれど、私は共感を必要としていなかった。

他人がどう言おうとも最早この考えは変わらない。

そこにどれだけの自己犠牲が付き纏ったとしても、私の場合はそれがどうしたで終わってしまう。

それこそが、バンハードにとっての『異常』。

「……でも、まあ、もう無理に共感してもらう必要はないと思うけど」

何故なら、もう私は『聖女』ではないから。

私を理解しようとする人間など、バンハードのような、私の体の壊れ加減を知る医者ぐらいである。実家の近くで細々と救済活動を続けるだけの今後は、そんな人物との接点は片手で事足りる程度だろう。

それこそ、『聖女』なんていう肩書きがない限り、滅多な事では接点は生まれない筈だ。

「結局、『聖女』として何を救うのが正しかったのかは分からず終いだったけど、それでもきっと意味はあったよね」

否定の声も肯定の声も聞こえてこない。

だけど、私は自分自身の中に存在するこの満足感さえあれば十分だった。それだけあれば、意味

立ち読みサンプル
はここまで

があったのだと思う事が出来た。
「最後はこうして倒れて、迷惑をかけちゃった。でも、私なりに出来る事は……した。案の定、限界がやって来たけど、それでも」
口酸っぱく己に出来る事をしろと言い続けてくれた、一人のシスターの姿を想起する。
「貴女の教えを私は守れていましたか……シスターメリッサ」
この時代において、誰も知らない邂逅。誰も知らない思い出。誰も知らない、教え。
そして私の根幹たるシスターメリッサだけが知る誓い。『光』であろうと、『救う』と決めたあの日の誓い。それらが今日までの私を突き動かす動力源でもあった。
そして、私の思考を横切る一瞬の懐古。
一つの映像が私の頭の中を侵食する。過去と現在が交錯し、やって来る思い出に一人酔い痴れた。
『――――光ですか』
それは夢の続き。
儚い夢の世界にて懐かしんだ記憶の続き。
『貴女は、自分自身が苦しむ人々を救う「光」となれる、と？』
そう問いかけるシスターメリッサに対し、私はかぶりを振る。
『なれる、ではありません。私は……ならなければいけないのです』
『……その言葉だけでは、まるで義務のように聞こえてしまいますね』
『はい。きっとこれは私にとって命題であり、天命であり、成さねばならない義務なのでしょう』

『天国』という救いは、残念ながら何処にも存在しない。死ねば極楽。そんな救いも持ち得ない人々は、一体何に縋って生きれば良いのだろうか。
救って欲しいと必死に手を伸ばす彼らに、誰が手を差し伸べるのだろうか。
……私のこの考えは夢物語だろう。
腹を抱えて大笑されて然るべき夢物語だろう。
しかし彼女だけは、シスターメリッサだけは、
『……そう、ですか』
決してこの想いを笑わない。
『貴女が真にそうしたいと思っているのならば、それが正しいのでしょう。それが、貴女にしか出来ない事なのでしょう』
――私には出来ませんでしたが、貴女なら。
消え入りそうな声で付け加えられたその言葉は、いやに耳に残った。
『……どうか、貴女の行く道に救いがあらん事を』
殊更ゆっくりと。
まるで祈りを捧げるように、シスターメリッサが言う。
『その想いを抱く間は、どうか多くの人々の「光」となってあげてください、ミレア』
莞爾と笑う彼女は、本当に綺麗だった。